

甘樫丘東麓遺跡の調査

—第171次

調査の概要 甘樫丘東麓遺跡では、小規模なものも含めこれまで合計8回の発掘調査をおこなっている。これまでの調査により、谷の広い範囲で建物・堀等が検出されており、7世紀から8世紀初頭にかけて、谷を大規模に造成し、土地利用をおこなっている様相があらわになっている。

今回の調査は、丘陵裾部の平坦部における遺構の展開、第161次調査（『紀要 2011』）で検出した石敷や硬化面の全容、谷入口部付近の土地利用の様相の解明を主な目的としている。調査面積は880㎡で、調査は2011年9月22日から開始し、3月現在も継続中である。詳細は、次年度の紀要において報告することとし、ここでは概要を報告したい。

調査の成果 今回の調査区は、北半の丘陵裾部が後世の耕作によって地山まで大きく削られ、耕作にともなう溝が残る。調査区西南部は、南東に開く谷の北側斜面に当

たり、南へと下がっていく地形であるが、この斜面を人工的に削って造成し、上下2段の平坦面を作り出す。このうち、上段平坦面では硬化面・被熱面・方形遺構・石敷等を検出し、下段平坦面では掘立柱建物・炭溜まり等を検出した。

これらの遺構の廃絶後、上段平坦面の西半を中心に、炭片や焼けた壁土が多量に混じった土（炭混土）が、厚いところで20cm程度堆積する。さらにその上層には、谷を一気に埋め立てた土（谷埋立土）が厚さ1.5m程度堆積する。この炭混土及び谷埋立土からは、飛鳥Ⅰの新しい段階およびそれ以前の土器が出土しており、特に炭混土から出土した土器の一部は、第75-2次調査（『藤原概報 25』）で検出した焼土層SX037出土土器と接合関係を持つ。

今回検出した硬化面・被熱面・方形遺構は、火を用いる何らかの生産に関わる遺構である可能性が考えられ、この場が一種の工房的な施設の一部であったことをうかがわせる。その具体的な性格については、現在、遺物の整理作業とともに詳細な検討を進めているところである。
（清野孝之・小田裕樹）



図166 第171次調査区全景（北西から）

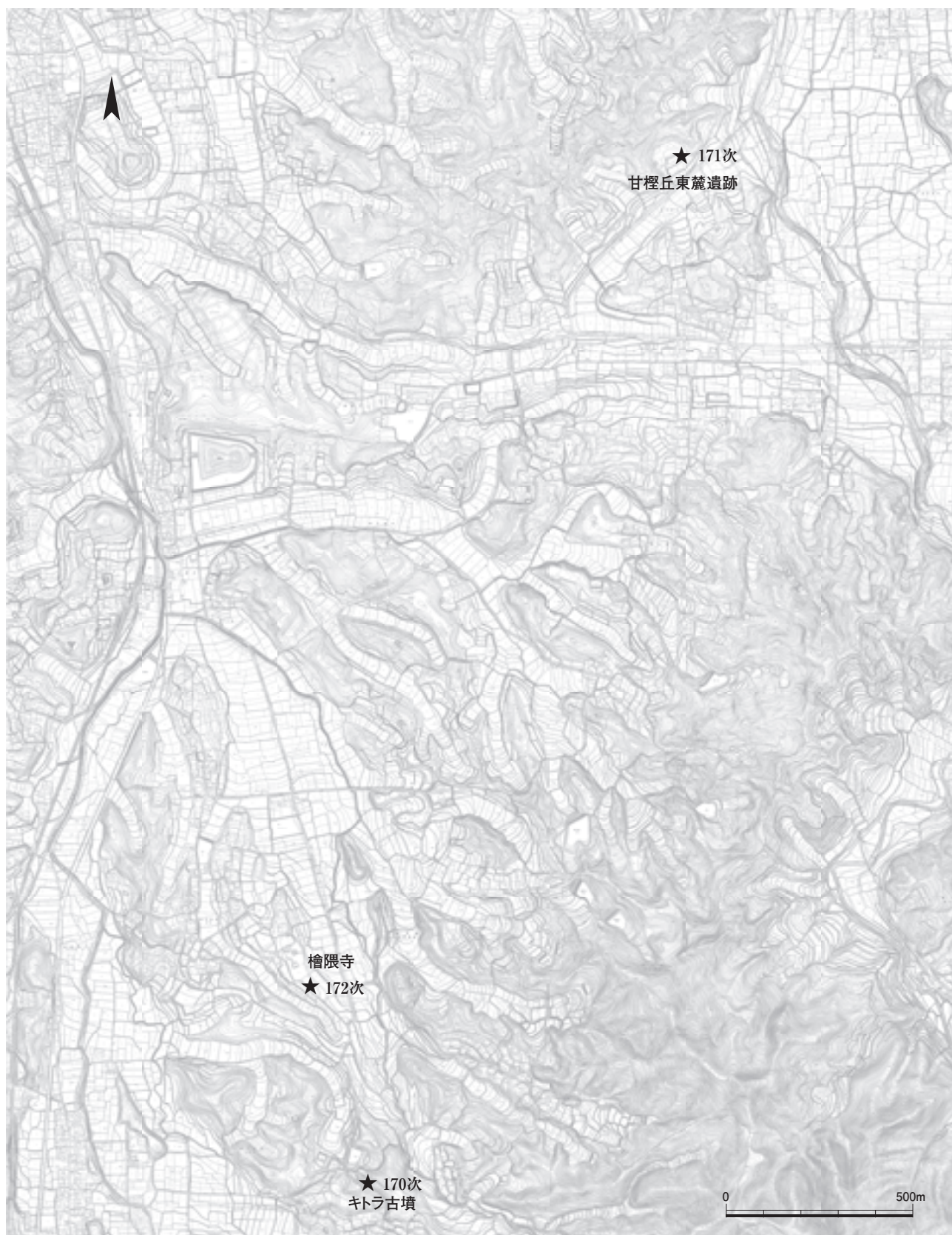


図167 檜隈寺周辺の地形図 1 : 15000